P2-032

レイチェル・カーソンの思想と子供の主体性が生き生き育つ豊かな保育環境

尾近 千鶴

川崎市立看護短期大学

【目的】
近年、物質的には恵まれた社会だが、コミュニティは希薄化し子どもやその保護者を取り巻く環境は変化している。「地球の美しさに深く想いを巡らせることの出来る人は生命の終わりの瞬間まで生き生きとした精神力を保ち続けることが出来る。」というレイチェル・カーソン（以下、カーソン）の思想を実践している保育園での活動を取り上げ、子供の主体的が健やかに成長できる豊かな環境とは何かを探求する。

【方法】
『センス・オブ・ワンダー』の著者カーソンと自然や子どもに関する思想家の文献を検討した。また、保育園に関する著書・資料（園便り、父母の会便り、委員会便り、卒園文集など）と施設見学をもとに保育理念「自分で考え自分で遊べ子どもたち」と照らし豊かな環境を検討した。個人を特定するような情報は載せていない。

【結果】
著書・資料や施設見学から以下のことがわかった。保育園では、自然の偉大さを感じ、すべての人や物に感謝できる心を大切にし、子どもが本来持っている生きる力を育んでいた。体験を通して心で感じ学んだことは子ども達の一生を支えるという理念を日々の保育で実践していた。保育者は知識を与えるのではなく、子どもの「なぜ」やつぶやきなど主体性を引き出していた。保護者は協力しあい父母会や委員会活動などを通し人員面経済面双方の支援をしていた。自然素材を生かした遊具を提供するなど緑豊かな保育環境を維持していた。子どもたちは年齢・性別・障害のあるなしにかかわらず助け合い、自然の中で五感をフルに活用し、自分の興味関心のある遊びに没頭していた。保育者と保護者は、現代社会のあり方を問い、「自然との共存」という別の道を見出す希望を子ども達の感性や主体性の中に期待したカーソンの思想を協働で実践していた。

【考察】
豊かな環境とは、多くの自然体験と他者との触れ合いができる時間と場と考えられる。保育者と保護者が協働で環境を整え、それに喜びを感じることで、子供が本来持っている主体的に生きる力と豊かな感性が育くまれると思われる。子供も大人も人間を超えた自然の存在を認識し全てを受け入れられる心を持ち、生きる喜びや満足感を得ることが、たとえ困難にぶつかっても乗り越えられる力を持ち、それがよりよい社会の構築につながっていくのではないかと考えられる。

P2-033

「歯科衛生相談事業」における歯と食事に関する事前アンケートの検討 ―年齢による比較―

高橋 摩理[1]、冨田 かをり[1]、内海 明美[1]、矢澤 正人[2]、関谷 紗央里[2]、五十嵐 由美子[3]、宮内 恵[4]、平川 知恵[5]、弘中 祥司[1]

[1]昭和大学　歯学部　スペシャルニーズ口腔医学講座 口腔衛生学部門、
[2]新宿区健康部健康推進課、
[3]新宿区健康部牛込保健センター、
[4]新宿区健康部四谷保健センター、
[5]新宿区健康部東新宿保健センター

【目的】
近年の歯科疾患の構造変化により、口腔の機能的な面に対する指導・支援が求められてきている。そのため東京都某区では子育て支援の一環として平成20年度から「歯から始める子育て支援」事業を開始した。1歳6ヵ月児、3歳児歯科健診の他に1歳児および2歳児歯科健診を実施し、健診前に歯と食べ方に関する事前アンケートを行ってきた。今回、各年代のアンケート結果から、幼児の口腔衛生状況や保護者が抱える食べ方に関する不安の実態を明らかにし、各健診時における支援方法の一助とすることを目的に本研究を行った。

【対象と方法】
対象は、東京都新宿区における歯科衛生相談事業に参加した1歳児1400名（男児701名、女児699名）、1歳6ヵ月児1739名（男児872名、女児867名）、2歳児1092名（男児550名、女児543名）、3歳児1749名（男児873名、女児876名）およびその保護者である。アンケートの各項目について年齢別に集計を行い、食べ方の問題の有無に関連する要因について検討を行った。統計学的有意差の検討には2項ロジスティック解析を用いた。

【結果】
「食べ方で気になることがある（以下、食べ方の問題）」と回答した者は、1歳児64.9％、1歳6カ月児76.7％、2歳児63.5％、3歳児72.2％で、食べ方について何らかの疑問・不安を抱えている保護者が2歳で減少し3歳で再度増加していた。食べ方の問題の内容で、「かまない」は1歳児では65.7％であったが年齢が上がるにつれ減少し、「好き嫌い」は2歳児が44.8％と一番多く、3歳児では多様化していた。食べ方の問題の有無に有意に関連する項目は、1歳児では手づかみ食べの頻度、1歳6ヵ月児では夜間哺乳の有無、3歳児では甘味食品・飲料の摂取頻度であった。2歳児では有意に関連する項目はなかった。

【考察】
食べ方の問題の有訴率は2歳児で減少したもの、3歳児では70％を超え、年齢が上がることで改善する問題ではないと推察された。内容は年齢により差がみられ、多様化する傾向が伺われたことより、年齢に応じた支援内容の検討が必要である。食べ方の問題に関連する項目は食に対する意欲に影響を与える項目であり、生活面の指導も重要と思われた。

【結論】
離乳期の1歳児のみならず、離乳が完了し乳歯列が完了する3歳児の保護者においても高率で食に関する疑問や不安を抱えていた。このことから、歯科事業による子育て支援の継続的指導と、年齢に応じた対応が重要であることが示唆された。

Presented by Medical*Online